

日本語教育における語彙の指導と習得—外国人生徒を対象に—

日本語教育領域 黒柳奈那

キーワード：外国人生徒、語彙マップ、作文、国語科、日本語教育

第一章 はじめに

日本に中長期滞在をする外国人登録者数の増加と共に、日本の公立学校における日本語指導の必要な外国籍児童生徒数も増加している。そこで日本で暮らす外国人生徒たちが日本語を使って自分の思いを確実かつ適切に相手に伝えるために彼らの語彙とその運用能力を高める必要性を感じた。

本研究では、日本の公立高等学校に在籍する外国人生徒に焦点を当て外国人生徒の語彙運用能力を明らかにするとともに、国語科の作文指導の観点から外国人生徒の作文指導の方法を検討することを目的とする。そのうえで、教師として外国人生徒の語彙の運用能力や作文能力の向上のための支援方法を探っていくことを目標とする。

第二章 先行研究

第二章では語彙の学習に関する先行研究と語彙の運用に関する先行研究を本研究の課題と関連付けながら整理して述べた。第二言語習得の研究分野における語彙の学習に関する先行研究では、語彙の学習は「付随的または偶発的学習 (incidental learning)」と「意図的学習 (intentional learning)」の二つに分けられ、読解を通じた「付随的学習」の限界によって研究者の関心は語彙習得の効果的手法へと移ったことが述べられている。弥永(2012)では語彙の学習における「関与負荷説」を用い、必要性が生まれたときに自分で意味を調べたり、対象語彙を使って文を考えたりする活動を行わないことが、その場での文章理解には役立つが語彙が習得されている可能性は低いという予測がされている。

語彙の運用に関しては、Gehrtz-三隅 (2000) で使われている語彙マップを取り上げた。Gehrtz-三隅 (2000) は語彙マップを語彙学習の一つとして捉えるとともに、自分を中心にした自己表現活動と位置づけた。また、清田 (2001) や斎藤他 (2015) は日本語の指導だけでなく対象の外国人生徒の発達段階も考慮する必要があることを述べており、思考力や表現力、話しことばと書きことばの移行など課題とされていることは多い。

本研究では先行研究を踏まえて、日本の公立高等学校に在籍する外国人生徒に焦点を当てた。

第三章 学習指導要領解説国語編に示された作文の目標

第三章では現行の（平成 20 年及び平成 22 年から現在まで）国語科の学習指導要領から作文に関する項目を取り上げ、小学校から高等学校までの国語科の作文に関する指導項目とその目標の段階を見てきた。外国人生徒、特に今回研究の対象になる生徒たちのように小学校の中学年以降に来日した生徒に対して学習指導要領の目標や指導項目を流用することは生徒たちにとってとても負担が大きく、学習意欲の壁になってしまうのではないかと考えた。そこで、以下の表のように指導項目を外国人生徒向けに作り変えて作文を評価・分析し、外国人生徒の語彙力や作文能力の向上を支援したいと考えた。

	課題設定・取材	構成	記述
第一段階	経験したことや事実	順番を考える。	◇接続語を適切に使う。 ・句読点などの記号の種類や位置を適切に書く。
第二段階	関心のあること	段落を作る。	◇文章の敬体と常体を統一して書く。 ・一字下げて書き出す。
第三段階	考えたこと		◇事実と感想、意見などと区別する。
第四段階	日常生活の中のことについて自分の考えをまとめる	段落の役割を考えて文章を構成する。	◇自分の考えや気持ちについて理由を明確にする。
第五段階	社会生活の中のことについて自分の考えをまとめる	自分の立場や伝えたい事実を明確にして、文章を構成する。	◇相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えて書く。
第六段階	社会生活の中のことについて、材料を集めて自分の考えを書く。	文章の形態を選択して適切な構成を工夫する。	◇論理の展開を工夫し、説得力のある文章を書く。 ・資料を引用して書く。

第四章 研究の方法

第四章では研究の方法について述べた。研究の対象は愛知県立 X 高等学校に在籍する A～G の 7 名の生徒で、共通点は現代文の授業を取り出し授業で受けているという点である。この調査は、対象者のもつ語彙とその運用能力を調査する目的で行う。調査方法は第二章先行研究で取り上げた語彙マップを用いることとする。7 名の外国人生徒に語彙マップを書

かせ、その後同じテーマで作文を書かせて、語彙力と文の構成力との関係を見ていくという方法である。テーマは全員に一定の経験があると思われる感情表現とし、「喜怒哀楽」の4つの感情について語彙マップと作文を書く活動を行った。

第五章 結果と考察

第五章では第四章で行った調査の結果とそれに関する考察を述べた。研究対象の生徒たちそれぞれの調査結果は以下のとおりであった。

生徒A：内容として、経験したことや事実を述べること、関心のあることを述べることはできているが、考えたことや、日常生活、社会生活に関する内容は書かれていない。文の構成に関しては、順番を考える点や、段落を作るという点では、箇条書きに終わる文がほとんどであるために達成しているとはいいたい。

生徒B：内容として、経験したことや事実、関心のあること、考えたことを述べることはできているが、日常生活、社会生活についての考えをまとめて書かれていない。文の構成に関しては、順番を考える点や、段落を作るという点では、箇条書きに終わる文がほとんどであるために達成しているとはいいたい。

生徒C：内容として、経験したことや事実、関心のあること、考えたことを述べることはできているが、日常生活、社会生活についての考えをまとめて書かれていない。文の構成に関しては、順番を考えることは達成していると評価できる。しかし、段落は作られていない。

生徒D：内容としては、経験したことや事実、関心のあることを述べることはできているが、考えたことや日常生活、社会生活についての考えをまとめて書かれていない。文の構成に関しては、順番を考える点や、段落を作るという点では、箇条書きに終わる文がほとんどであるために達成しているとはいいたい。

生徒E：内容としては、経験したことや事実、関心のあること、考えたことを述べることはできているが、日常生活、社会生活についての考えをまとめて書かれていない。文の構成に関しては、順番を考えることは達成しているが、段落は作られていないことから、達成しているとはいいたい。

生徒F：内容としては、経験したことや事実を述べること、関心のあること、考えたこと、日常生活の中のことについて自分の考えをまとめて述べることはできているが、社会生活に関する内容は書かれていない。文の構成に関しては順番や段落を作るという点は、文の量は少ないながら、書いている内容が変わる際に一字下げるといった記述の形式を遂行しようとした点から達成していると評価できる。

生徒G：内容として、経験したことや事実、関心のあること、考えたことを述べることはできているが、日常生活、社会生活についての考えはまとめて書かれていない。文の構成に関しては、順番を考える点や、段落を作るという点では、箇条書きに終わる文ばかりであるために達成しているとはいいたい。

語彙に関して、今回の語彙マップを使った作文の前段階指導は、生徒がその効果を活かすことは難しかったように思う。テーマに沿った語彙選びや自身の考えていることを一度書き出してみるという活動としては有意義な活動であったが、作文を書く際にテーマが広がりすぎて絞り切れなかったり、語彙マップに書いたものを生かし切れていない内容になっていたりしていた。語彙マップの効果を発揮させるために必要だったことは語彙マップと作文の間に生徒との対話を行うことであった。この対話を行うことで生徒のもつ作文に対する抵抗感を少なくすることができ、より安心して作文に取り組めると考えられる。

また、作文の課題設定に関しては「喜怒哀楽」という全員が一定の経験を持つと考えられる感情に関係したものをテーマに設定したが、身近であるがゆえにテーマを絞れず箇条書きなどで事実のみを書いてしまうことがあると分かった。テーマの幅が広すぎたことも、中心となるテーマが絞りづらくなり外国人生徒にとって書きづらいのだとわかった。より明確に設定を提示することや、それぞれの外国人生徒の書きやすいテーマを与えること、語彙マップと作文の間に対話を行うことが外国人生徒に対する作文指導で重要であることがわかった。これらを繰り返して行くことで、それぞれの外国人生徒にとっての「書ける」テーマや「書きたい」と思えるテーマを見つけられるのではないだろうか。

第六章 結論

本調査を通して、各生徒によって作文能力の差はあるが、それぞれの課題が見えてきた。教師の指導や支援によって彼らの作文能力は向上していくと考えられる。その支援として以下の3点を提案する。

- 1) 生徒が積極的に書きたくなるような題材を見つけるために語彙マップの活動を行う。
- 2) 作文を書く際の立場等の設定を明示する。
- 3) テーマについて生徒と対話をする。

この3点を徹底することで外国人生徒の作文能力の向上や、作文への抵抗感の減少につながるのではないだろうか。これらの支援は段階的かつ継続的に行うことが重要である。そのため高校という学校に所属していることは、この方法で日本語を学ぶ環境として適していると考えられる。また、この活動を通し、外国人生徒たちの語彙の広がりや作文を観察し、教師として生徒のためにどのような支援が必要か、外国人生徒たちは何に困難を感じるのかを知ることができた。冒頭でも述べたように現在、外国人児童生徒は増加傾向にある。小学校や中学校から継続してこのような支援ができれば、今後の外国人児童生徒はさらに自分の意見を深め、適切に表現できる感情豊かな人間に成長するのではないだろうか。

参考文献

- 今澤悌、斎藤ひろみ、池上摩希子 (2005)『外国人児童の「教科と日本語」シリーズ小学校「JSL 国語科」の授業作り』スリーエーネットワーク
- 大森雅美、鴻野豊子 (2013)『日本語教師の7つ道具シリーズ3 作文授業の作り方編』アルク
- Gehertz 三隅友子 (2000)「学習カウンセリングの可能性～語彙マップをつかった学習」『日本語教育連絡会議論文集』Vol. 13, <<http://renrakukaigi.kenkenpa.net/index.html>>
(2016年11月10日閲覧)
- 斎藤ひろみ、池上摩希子、近田由紀子 (2015)『外国人児童生徒の学びを創る授業実践―「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み―』くろしお出版
- 佐藤群衛、斎藤ひろみ、高木光太郎 (2005)『外国人児童の「教科と日本語」シリーズ小学校 JSL カリキュラム「解説」』スリーエーネットワーク
- 鈴木和美 (2011)「中級日本語教育における教師の発問 ―読解授業データからの考察―」, 『創価大学大学院紀要』33号, pp.258-278, 創価大学大学院
<<http://daigakuin.soka.ac.jp/>> (2016年12月22日閲覧)
- 坪根由香里・鈴木理子・阪本史代・神谷道夫 (2001)「学習者から見た効果的な語彙の指導法・学習法―アンケート結果より―」, 『小出記念日本語教育研究会論文集』9号, pp.107-130, 小出記念日本語教育研究会
- 三上京子・原田照子 (2011)「多読による付随的語彙学習の可能性を探る―日本語版グレイディッド・リーダーを用いた多読の実践と語彙テストの結果から―」, 『国際交流基金日本語教育紀要』7号, pp. 7-23<<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008152922>>
(2016年12月4日閲覧)
- 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省 (2008)『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省 (2010)『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版
- 弥永啓子 (2013)「読解の授業における語彙指導―最新の第二言語語彙習得の実証研究に基づく考察―」, 『京都橘大学研究紀要』39号, pp.162-145, 京都橘大学研究紀要編集委員会 <<http://id.nii.ac.jp/1190/00000011/>> (2016年12月4日閲覧)
- 山下喜代 (2004)「日本語教育における語彙指導：字音接辞の指導を中心にして」『青山語文』34号, pp.142-153, 青山学院大学日本文学会
<<https://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/10110/>>
(2016年11月10日閲覧)
- 愛知県ホームページ<<http://www.pref.aichi.jp/>> (2016年12月27日閲覧)
- 法務省ホームページ<<http://www.moj.go.jp/index.html>> (2016年12月27日閲覧)
- 文部科学省ホームページ<<http://www.mext.go.jp/>> (2016年12月27日閲覧)